

日本経年調査対象校への聞き取り調査の結果

調査対象：2003年度および2006年度調査に継続してご協力いただいた調査対象校（5校）の英語科の先生方

調査時期：2007年6月～7月

調査方法：電話もしくは訪問による聞き取り調査

調査目的：英語コミュニケーション能力調査およびアンケート調査の結果から、2003年度と2006年度との間でみられたいくつかの変化について、より実態に即した考察ができるように、個々の学校の指導内容や生徒の実態に関する情報を収集する

調査項目	A校	B校	C校	D校	E校
1) 英語単位数 * 本聞き取り調査および学校ホームページの情報をとくに記載	1年生：6単位 2年生：7単位 * 調査対象となったコースについてのみ記載。	1年生：6単位 2年生：5単位	1年生：5.5単位 2年生：7.5単位 理系：5.5単位	1年生：5単位 2年生：人文系：6単位 外国語系：9単位 理数系：5単位	1年生：5単位 2年生：6単位
2) カリキュラムの変化 (03-06年度)	英語に関して、現課程ではリーディングを高2、高3で1単位増やした。指導内容は大きくは変化していない。増えた時間で練習問題をしている。	変化なし。	変化なし。	変化なし。	変化なし。
3) 行事（海外ホームステイなど）の変化(03-06年度)	修学旅行でハワイに行っている。以前より修学旅行はハワイだが、2006年度よりハワイアンプロジェクトとして、4ヶ月にわたる事前事後学習を行った。	(変化ではないが)スピーチコンテストに有志が参加をしている。	行事は多いほうだが目立つ変化はない。 ・(変化ではないが)オーストラリア・韓国・タイの姉妹校との相互訪問（語学研修、交換留学生の受け入れ）をしている。タイ訪問時には、(科学などの)研究成果の英語でのプレゼンテーションなども経験している。また、交換留学生受け入れ時は、全クラスに配置されるので、全員が交流の機会に恵まれている。 ・スピーチコンテスト、交流会など外国人と一緒に行うイベントもある。	特に定まったものはなく流動的である。 ・今年初めて高2がオーストラリアに1週間行った(ホームステイは実質2-3日)。	お金のかからない方法で、県が募り集めている行事に有志を募って参加させるといったことは実施している。しかし、英語に関して特別な行事(短期の留学など)を設定するといったことは、特に熱心には行っていない。やはり、費用の面での負担が大きい。

* 空欄は回答が得られなかった項目。

調査項目	A校	B校	C校	D校	E校
2. 英語科の指導					
1) 指導方針・内容の変化 (03-06年度)		<ul style="list-style-type: none"> 指導の変化ではないが、英語科教員は高1～高3まで2人体制で、入学から卒業まで同じ教師が教えることとなっているため、学年の特色(違い)がある。 学年の特色という話は、英語科だけでなく他教科も同様。学年全体として、生徒たちが「勉強しよう」という雰囲気になることが、学力の伸びに大きく関わっている。 	<p>一期生あたりの教員の意識としてはコミュニケーション重視の傾向があったようだが、外部から教員が入り、入れ替わることにより、文法なども適度に取り入れられるようになり、バランスはよくなったのではないかと思う。</p>	<p>特に変えていない。シンプルに、学習習慣を身につけると言うことを目標にしている。リスニングに関しては、オーラル・コミュニケーション(OC)などですっかり扱おうようになっている。</p>	<p>オーラルコミュニケーション(OC)を入れて、コミュニケーション能力をやり始めていて、OC自体が捉え難い。実際に大学入試や就職試験で必要なのは、コミュニケーション能力なことよりも長文読解力だったりする。もう少し長文読解力を入れるために補習を取りするが、実際はあまり時間が取れない。カリキュラムを活用しきれないという実感がある。</p>
2) ライティング指導の変化 (03-06年度) (ライティングのスコアの変化に関連して)	<ul style="list-style-type: none"> ライティングは、高2で力を入れている。 ライティングのスコアが伸びたのは、入学者の学力レベルがあがったことが要因のひとつとして、あるのではないかと思う。 ライティング指導については、2003年度に比べて、2006年度では、教えるべき内容が指導者自身、よくわかった上で指導をしていたという感覚がある。 	<p>調査対象の2006年度高2については、アウトプットに力を入れて指導を行っていた。</p> <ul style="list-style-type: none"> 高2では、教材で構文集や用例などをよくやっているのだから、それが活かしているのではないかと思う。 	<p>(変化ではないが現在の取組みとして)副読本を半年で5～6冊読ませ、自分の意図を書かせたり、登場人物の意図をエッセイにまとめさせている。さらに、その中から印象に残った本についてブックレポート(300～400語程度)を書かせて校内でコンテストを開いている。その他、英作文コンテストにも参加しており、正確さは別としても書くことに対しては抵抗がないと思う。</p> <p>また、今の2年生には英語日記(1行日記)を書かせている。</p>	<p>ライティングは、今年から導入している。</p>	<p>カリキュラムには何年か前から入っているが、2003年度以降、ライティングのポイントを絞って指導しているわけではない(リスニングやリーディングに關しても同様で、これらの技能に特化して指導しているわけではない)。</p> <p>ライティングのスコアが伸びたしたら、ライティングの力がついてきている生徒が入ってきている可能性がある。また、生徒もライティングの力をつけることを意識しているので、伸びてきているのかもしれない。</p>
3. 生徒の状況					
1) 入学者層の変化 (03-06年度)	<p>2005年度に入試の合格点を引き上げており、それに伴って、入学してくる生徒の学力レベルが高くなっている。</p>	<p>特に変化なし。</p>		<p>ここ10数年変化なしと聞いている。</p>	<p>生徒の学力レベルは、入試の合格率が上がってきていると聞いているので、もしかしたら上がっているかもしれない。</p>

* 空欄は回答が得られなかった項目。

調査項目	A校	B校	C校	D校	E校
3. 生徒の状況					
2) 英語に対する意識の変化 (03-06年度)	<p>・実感としては、2006年度の生徒の方が、英語に対する関心が高い。</p> <p>・入学時に学校で実施しているアンケートをみると、「海外にいったことが」「インターネットで、ポイントが上がった。これは、入学してくる生徒の学力レベルが上がったことによるのではないか」と思っている。</p> <p>・英語に関するものに対して、抵抗感がなくなっている。</p>	<p>印象では、積極的な生徒が増えている。但し、役に立つか否かの実利主義の傾向はあるかもしれない。</p>	<p>生徒の英語使用経験について、(生徒の意識の変化というよりも)メディアなど経験の質が違ってきているのではないかと、例えば、ESSの生徒でインターネットラジオなども聴いている生徒はいるようではあるが、基本的に今の高校生は、英語・日本語にかかわらずラジオをあまり聴かない。携帯やMP3などで音楽を聴くという生徒がとても多い。今回の調査票が、そのあたりの高校生の変化に対応していないのではないかと感じる。</p>	<p>・(現在の生徒は)「英語を話したい」という意識はあるが、実際にやってみようという意欲は低く受身である。この辺が(英語使用経験率の変化)に関係している可能性がある。これは英語に限らず全般的にみられる。</p> <p>・「しぶとくやってみる」意欲に欠け、面倒に思う傾向がある。例えば、中学で辞書を引き指導を受けていなく、電子辞書で調べて最初に出てくる意味で分かなければそのままにしてしまっている。</p>	<p>(現在の生徒は)受身の生徒が多い。自分から何かをやってみようとする意欲がないように感じる。生徒の周りに情報が多くあるせいも、自ら情報を収集していくという感じではない(生徒に準備して与えてしまっているせいもあるかもしれない)。</p>
3) 教育課程の変化による影響 (2003年度生＝日課程 2006年度生＝現課程)	<p>実感レベルでは、2006年度の生徒は、ペアワークや話す活動に抵抗がない。文法などは塾でやっているのか2003年度の生徒との違いはそれほど感じない。</p>	<p>リスニング力が上がったと感じる。文法などの理論的な裏付けが弱い。</p>	<p>現課程生のほうが中学校でコミュニケーション活動を多くしてきたからといって、特に力(音読する力など)が伸びたとは思わない。文法事項(基本文型など)、語彙などについては、むしろ身につけていないように感じる。</p>	<p>・(現課程生の)良い点は、リスニング力と話す意欲が高くなった点である。悪い点は、文法の力がかなり弱いところである。センタ一試験でも文法部分がとて弱い。</p> <p>・生徒たちの声としては、中学時代に塾で文法は習ったが、よくわからないと言っている。また、中学校の先生からは、文法用語を意識して使わないようにしていると言っている。</p>	<p>・特に感じないが、若い世代は「耳」がよいという感覚はある。</p> <p>・中学校段階での文法指導が少なくなっている感覚がある。塾などで学んでいるようだが、それでもあまり理解してないように感じる。そのため、高校生は文法が弱く、長文読解が弱い。一方でコミュニケーション力という力は上がっているようである。</p>
4) 小学校段階での英語学習経験者の特徴	<p>リスニング力がついていると思う。ALTの訪問などの影響があるのではと思う。</p>	<p>学習頻度にもよるが、「耳がよい」「英語に対する興味が高い」という生徒がいる。半面、「中学生、高校生になって英語が楽しくなくなった」という生徒も多い。両極端である。</p>	<p>どの生徒が小学校段階で英語を学習してきたかが分らない。学習の影嚮を感じていない。小学生と高校生では、少し離れているので、影嚮はみえにくいのではないかとと思う。</p>	<p>どの生徒が小学校段階で英語を学習してきたかが分らない。学習の影嚮を感じていない。小学生と高校生では、少し離れているので、影嚮はみえにくいのではないかとと思う。</p>	<p>どの生徒が小学校段階で英語を学習してきたかが分らない。学習の影嚮を感じていない。小学生と高校生では、少し離れているので、影嚮はみえにくいのではないかとと思う。</p>

* 空欄は回答が得られなかった項目。

調査項目	A校	B校	C校	D校	E校
4. 英語科の教員					
1) 大きな異動(03-06年度)	なし。	なし。		年によって異なるが、今年半分は半分以上入れ替え。但し、教師の異動による影響はない。授業のやり方には変化はなく、今までのやり方を踏襲している。	特になし。異動があったとしても、それによる影響はない。
2) 悉皆研修の導入による影響	特になし。	特になし。		変化は感じていない。研修によって、色々な手続き等が煩雑になり、普段の仕事が出来なくなっている。	変化は感じていない。研修に参加するために、諸々の手続き等に教材研究の時間がとられてしまう。また、研修に出るときは生徒に自習をさせるなどの対応が必要で授業時間も減ってしまっている。
5. 高校入試					
1) ライティング問題の変化(03-06年度)	特に大きな変化はない。	(高校入試に関連して) 中学で特にライティングをやってきているという印象はない。	(変化ではないが) 高校入試の英文自由記述問題では、塾でかなりしっかりと書く練習をさせられたというところを感じる解答となっている。	ここ2~3年コミュニケーションを意識したものに変わっている。もしかしたら、この辺がライティングへのプラスの効果になっているかもしれない。	ここ数年、自由作文が導入されている。
2) リスニング問題の変化(03-06年度)	10年前ぐらいに導入。		県の入試が変わったのは、今から10年ほど前。英語に限らず、記述問題が増えた。英語では、例えば、リスニング問題でディクテーションなどが入っている。	10年前からずっと導入されているので、これによる変化はないだろうと思われる。	かなり昔からリスニング問題は導入されているので、変化は特にみられない。
6. 大学入試					
1) センター試験へのリスニング導入による影響(リスニングのスコアの変化に関連して)	特に感じることはない。但し、教師側としては、センター試験に入ったから、という理由で、リスニングの教材を全員に持たせやすくなった。	影響あり。生徒側も教師側も意識の変化があった。授業の中でもリスニングに時間をとるようになった。		<ul style="list-style-type: none"> 高校で少し学習したからといって成績が上がったわけではない。 一方で、大きな影響はないと考える。 センター試験対策として、演習をやるという教員側の意欲は上がった。 	<p>(スコアの変化) センター試験の導入によって、リスニング教材が充実してきたからではないが、これまでは自前の教材を使ってきたが、既製の教材が増え、教師が使いやすくなった。教科書にもリスニングに関する活動が増えている。あとは、英語が身近になり生活の中でも溢れているので、生徒たちのリスニングに対する意識が高くなってきていることも要因の一つではないかと思う。</p>

* 空欄は回答が得られなかった項目。

韓国教育専門家への聞き取り調査の結果

調査対象：星槎大学准教授、国立教育政策研究所客員研究員 金 泰勲氏

調査時期：2007年4月

調査方法：訪問による聞き取り調査

調査目的：アンケートおよび英語コミュニケーション能力調査の結果でみられた日韓の違い（特にGTEC for STUDENTSのスコア、および、英語使用経験の違い）について、より実態に即した考察ができるように韓国の英語教育、学校、高校生に関する情報を収集する

調査項目	回答
------	----

1. 韓国の高校の特性

1) 学区制	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国の高校は地域毎の学区制(17の大・中都市では、高校入試はない)。 ・学区制なので成績にかかわらず地域の子どもたちが進学するため、色々な子どもが一つの学校に集まり、学力の幅は大きくなっている。 ・高校・大学ともに入試結果に毎年ランキングが付けられ公表される。高校のランキングについては、主にソウルの大学進学を中心にランキングがつけられる。そのため、ある学校が大学入試でよい結果を出すと、高2の夏から2学期にかけて、他の地域からその地域に生徒が引っ越してくるといような状況がある。そのような高校は2学期以降、急に生徒数が増える。大学入試が終われば再度引越し元の家に戻る。
2) 校種	<ul style="list-style-type: none"> ・高校入試はないが、「学力テスト」があり、それによって普通高校か職業高校に進学するかが振り分けられる。圧倒的に普通高校が多い。 ・職業高校には、今は情報系の学校もあり、それで生徒を集めようとしている。その他、特別目的高校として、外国語やデザインの勉強が出来る学校を設立したりしている。特別目的高校は普通高校での教育課程の3割を履修すればよいことになっている。その他、フリースクールのような学校もある。大学では特別枠を設け、これらの学校の生徒も大学進学できるようにしている。そのため普通高校に進学せず、このような学校をあえて選んで大学進学しようとする人も増えてきた。
3) 地域による学校間の差異	<ul style="list-style-type: none"> ・地域によって大きく異なり、教育内容も異なる。学校のある地域に住んでいる人々の影響が大きい。
4) 塾との関係	<ul style="list-style-type: none"> ・かつては塾に偏重していたが、それでは親の経済力の格差が影響するということで問題視され、現在は学校中心になってきている。

2. 調査対象校の特徴

1) 学力層	<ul style="list-style-type: none"> ・韓国での中の上と考えてよいだろう。調査対象校群は平均的な韓国の学校像と捉えて問題ないと思う。そういう意味では良いサンプリングだったと思う。 ・今回サンプルには入っていないが、高校入試が残っている小・中都市で今回の調査を実施したら、もっと高いスコアを出していたかもしれない。
2) 調査対象校のある地域	<ul style="list-style-type: none"> ・A校：ソウル市郊外にある(日本でいう東京郊外のニュータウンのような所)。 ・B校：理工系の私立で専門教育成が目的。大きな企業の社宅があり比較的裕福なエリアである。この学校の地域には日本人も多い。

3. 英語力(GTEC for STUDENTS)の結果に関連する内容

1) トータルグレード	<ul style="list-style-type: none"> ・トータルグレードの分布において、韓国のほうが日本より各グレードに均等に分かれているのは、韓国の高校には様々な学力の生徒が存在していることが理由の一つとして考えられる。 ・グレード5、6の生徒が日本よりも多いことは、早期留学や海外への短期語学研修などを小さい頃からやっている影響があるかもしれない。しかしながら、帰国子女ではなく、基本的に韓国国内で英語を勉強している場合でも、帰国子女かと思うくらい英語が上手な生徒も多い。
2) リスニング	<ul style="list-style-type: none"> ・大学修学能力試験でのリスニングに、英語だけでなく韓国語のリスニングも6問あることや、韓国語は日本語に比べて母音の数が多いことなどから、日本人よりは耳が鍛えられている可能性がある。
3) ライティング	<ul style="list-style-type: none"> ・ライティング力の低さは韓国でも問題になっており、昨年度より力を入れ始めた。教育のカリキュラムも変更しようとしている。それまでは、「聞く」「話す」点で使える英語を身につけさせようと一生懸命だった。しかしこれでは不十分ということで、「書く」ことにも力を入れようとしている。 ・ライティングの宿題で「日記を書く」という活動も最近は始めているようだ。 ・現在の大学修学能力試験での英語のライティングの問題は、マルチプルチョイスのものである。

調査項目	回答
------	----

4. 英語使用経験の結果に関連する内容

1) 社会の状況	(以下、全般に韓国の生徒の英語使用経験率が高いことについて) <ul style="list-style-type: none"> ・ 日常で英語を使用することが、宿題として指導されている可能性が学校によってはあるかもしれないが、それよりも社会全体が「英語が出来なければならない」という風潮になっていることが大きい。 ・ 企業に就職するには英語が使えることが必要で、今では大学のブランドよりも、地方の小さな大学出身であっても英語が使える学生のほうが就職しやすい状況もある。かつてはソウル大卒だと100%就職できていたが、今はそうではなくなってきた。ちなみに、大企業では社内では英語でコミュニケーションをとっているところもある。 ・ このような社会状況なので、親も必死で英語を勉強させる。生徒たちも社会で生き残るために必死で英語をやる。昔は「英語は嫌いだから勉強しない」という生徒もいたが、今はそのようなことを言っていられる状況ではなく、「英語は嫌いでもやらないといけない」と生徒は必死になっている。
2) 生徒の積極性	(以下、全般に韓国の生徒の英語使用経験率が高いことについて) <ul style="list-style-type: none"> ・ もともと韓国の生徒は、「英語を使ってみよう」という気持ちが非常に強い。 ・ (積極性には)教育の影響がある可能性がある。韓国ではリーダーシップを取らせようという教育を実施している。また、積極的に意見を言うという教育を受けているので、英語に関しても積極的になる可能性はある。授業でも先生の説明に納得しなければ、韓国の生徒はほとんど質問してきたりして、納得がいかない旨を教師に伝えるが、日本の生徒は質問をしない。このような性格的な違い(国民性)も影響しているかもしれない。
3) 個別の項目の結果	<ul style="list-style-type: none"> ◆「英語で道を尋ねられて答える」活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 地方都市と大都市では機会の差はあるだろうが、実際、そのような機会があればよくやっている。調査対象校のある地域は、特別に外国人が多いわけではないが、英語で話しかけられても一切逃げたりしないで、自分の使える英語で(片言でも)どんどんコミュニケーションをとっている。 ◆「英語のニュースを聞く」活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ 韓国ではケーブルTVがほとんどの家でみられる。50~60チャンネルあり、BBCや在韓米軍向けのチャンネルなどがたくさんありとても充実している。英語だけでなく中国語・日本語のチャンネルもある。月額千円程度でみられるが、これは、韓国政府がサポートしているからで、政府はインフラ整備に非常に力を入れている。 ◆「英語のホームページやブログを読む」活動 <ul style="list-style-type: none"> ・ インターネット使い放題で月額千円程度である。こちらも政府がサポートしているから、この金額で使用できる。

5. 大学の状況

1) 大学入試の内容	・ 大学入試に必要なのは、「大学修学能力試験」、「総合学生生活記録簿」(高校の内申書)、大学独自の2次試験である。ただし、教科に関する本テストの実施は不可。韓国の大学入試は「三不正策」をとっている。つまり、「寄付金入学」、「本テスト」、「高校等級制(ランキング付け)」を認めていない。
2) 大学入試の変化	・ 英語のライティング能力の低さが問題視されており、教育制度も変更される見通し。そのため、今後はライティングの試験が変わる予定である。
3) 大学入試にむけた学習	・ 学校中心で行われている。高1から、夏・冬休みはほとんどなく、夏休みも1週間程度。夜11~12時くらいまで学校にいて、自習という形で勉強する。政策として、有名塾の講義が学校に配信され(EBS*)で、生徒たちは学校でそれをみながら学習している。早退したい場合は、親の申請書が必要になる。朝も7時前に学校に行っており、部活をする時間はないような状況である。(地方・ソウル市とも同じ状況) *韓国教育放送公社(国営の教育専門放送局)
4) 大学の状況	・ 英語で講義が出来ない教員は採用しない大学や、英語で講義が出来る教員には特別手当を出すなどして英語のみでの講義を増やそうとしている大学がある。

6. 小学校英語教育

1) 小学校で英語を教える教員	<ul style="list-style-type: none"> ・ 英語専科を出た人が多い。2006年3月現在小学校教員全体の男女の比率は、女性約72.0%、男性約28.0%となっている*。年齢層は比較的若い人も多いが、各年代が均等にいる。 ・ 教員の地位は、昔に比べると多少は低下しているが、日本に比べると尊敬されている職業である。 ・ 大変優秀な女子生徒は教育大学に進んで、小学校の教員になる人が多い。教育大学は100%就職できる。むしろ、あまりに女性が多いので、男子枠を30%設けるようにしているほど、教育大学の女性の比率は高い。 ・ 現在、少人数教育のために教員を増やしている。 <p style="text-align: right;">*出典:教育人的資源部韓国教育開発院「教育統計年報2006」(2006年、p32)。</p>
2) 保護者の変化	・ あるアンケート調査によれば、小学校で英語が導入されたことで、保護者の99%が自ら英語を学びたくなったと回答していた*。 *出典:中央日報社「中央日報」(2006年1月21日)

7. その他

	・ 韓国は教育大臣=副総理なので、非常に地位が高い(教育と経済に関わる大臣が最も地位が高い)。つまり、韓国はそれだけ教育に力を入れている。また、教育大臣には官僚ではなく、例えば、ソウル大学教育学部などの教育専門の研究者が選ばれることが多い。
--	--